

から注意せよ…」と書いてある。従って、当局も不都合なことは十分承知しているわけである。承知していて改めないのは何故だろうか。ひとつ考えられるのは、春の最大のイベントであるイースター（休暇）が毎年一定しないためではなかろう

か。ちなみに、他の年次の調査日は次のようであった。1911年…4月2日、1921年…6月19日、1931年…4月26日、1951年4月8日、1961年…4月23日。

餅つきの復活

内 藤 博 夫

幼かった頃の思い出の一つに餅つきがある。私の家では旧母屋の土間で祖父が祖母の協力をえながら餅をつくのがならわしだった。つき上がった餅は木製ローラーで適当な厚さにのされる。30cmほどの刃をもつ包丁で餅を切るのは母の役目で、子供の私もそれを手伝った。力を入れて切ろうとすると刃の背中が手のひらに食い込んでくる。その痛みをこらえながら手伝ったことを覚えている。

年末の重要行事だった餅つきは、私の家の場合は祖父が亡くなるとともに行われなくなった。知人に頼んでついてもらうか、商品としての餅を買うかするようになって現在に至っている。こうした変化は近隣の家々に共通してみられた現象である。私が住んでいる地区は、かつては市街地の周辺に位置し、半農村的色彩を残していたが、昭和30年代以降の住宅地化の進展と生活様式の洋風化の波に押されて、餅つきは各家庭から姿を消していった。

ところが4年前から、そのときは地区内の空地を利用して、餅つき会が行われるようになった。これに参加する家は15戸前後、隣り近所さそい合わせての参加である。きっかけはたまたま近隣社会の親睦行事に熱心で、お互いに気心の知れた人が数人いたことによる。このグループの形成を分析してみると、その要因としては近所であることのほかに、子供を介してのつき合いがあげられる。これらリーダーたちの家庭には同じ保育園または幼稚園にスクールバスで通っている子供がいた。スクールバスの停留所で子供の送り迎えをするのは母親の役目だった。そのため停留所は

同じ年頃の幼児をもつ母親たちの恰好の社交の場となった。この母親たちのつき合いが父親たちのつき合いに発展し、その中から餅つき会推進グループが生れたのである。

餅つき会の会場は当初の空地から道路をはさんだ向いのお宅の庭に変わった。空地は2年前に駐車場に転用されてしまったためである。昭和57年の餅つき会は12月26日と決まった。餅つき会では前日に地区の主婦が共同して仕込んだおでんが出る。その仕込み場には私の家の台所が毎回利用されてきた。今回も私の家選ばれ、25日の昼間はおでんの材料の買出しが行われた。料理店から借りたという直径が50cmもある大鍋とそれをのせる大型レンジ、およびプロパンガスのボンベが持込まれた。近所の主婦4名は午後8時にわが家に集合し、家内も加わって12時まで翌日のおでんの下ごしらえを行なった。26日の餅つき会は日曜日であったにもかかわらず午前8時半から始まり、午後1時半まで続いた。参加者は子供を含めて延べ50名であった。餅つきを行うのは30才台の男性で、同じ世代の女性たちは餅米の運搬とおでん作りに従った。つき上がった餅は屋内に運び込まれ、年配の女性によってのされていく。餅つきのための臼と杵はあるお宅から、餅米を炊く釜と蒸籠（せいろ）は別のお宅からという具合に餅つき用具は持ち合せのある家から提供された。いずれも旧農家の方々であった。当日はあいにく小雨まじりの寒い日だった。私は風邪が十分に直っていなかった。今回は杵をふり上げることは見合わせ、「見学」で通すことにした。餅米はコンクリートブ

ロックを積み上げて作った即席の竈に薪をくべて蒸されていく。つきたてのからみ餅、あんこ餅、きなこ餅と温かいおでんが参加者に配られる。餅もおでんも食べ放題、子供たちのはしゃぐ姿がほほえましかった。屋内でのされた餅は納めた会費の額に応じて後日、参加した各戸に配られた。

このように餅つき会は近隣社会の親睦会として

定着したかに見える。各家庭で餅をつくことが困難になっている現状では、餅つき会は親睦のほかにも正月用お餅を共同してつくるといった実利的意味ももっている。またそれは子供たちに米の伝統的蒸し方や餅のつき方を実際に学ばせる機会ともなっているのである。

SF「20年後の大学教育」

三 上 岳 彦

2003年某月某日。A大学地理学教室のB教授は、午後の地形学の講義準備に余念がなかった。先日フィールドで撮影してきた断層地形のビデオテープを学生に見せることになっている。教室に備えられているテレビは、30インチと大型の上、走査線が1000本以上もある高品位TVと呼ばれるもので、数年前から各家庭でも普及し始めてきた極めて画質の高いものである。しかも、付属のカラー・プリンターから任意の画面をプリントすることができるので、教材としての利用価値は高い。衛星写真の直接受画装置と併用すれば、教育効果はさらに増すだろう。

衛星写真といえば、A大学本館の屋上には静止気象衛星からの電波を受信するパラボラ・アンテナが備えられており、C教授は気候学の研究・教育に受信された雲画像を用いている。衛星写真とともに欠かせないのが、各種の気候データであるが、10年程前にD大学地理学教室に大規模な気候データバンクが完成し、今では多くの大学の地理学教室の端末装置から随時必要なデータを取り出すことができるようになっている。しかも、このデータバンクには、観測時代のデータだけでなく、数百年にわたる歴史時代の各種気候データ（天候、災害記録、花粉分析データ、年輪分析データなど）が入力されているため、気候学だけでなく地理学・歴史学の諸分野での利用価値も高いと思われる。

C教授は気候学実習という科目を担当している

が、小気候の観測法も昔とは大分変わってきた。20年程前までは、野外での気温観測といえば、ゼンマイでファンを回すアスマン通風乾湿計がよく用いられていたが、最近はほとんどその姿を見ることができなくなっている。気温や湿度の移動観測では、何よりも応答速度の速いことが要求されるため、現在では電子式デジタル表示の小型乾湿計が幅をきかせている。マイコンとプリンターを内蔵しているので、観測値をノートに記入する必要もない。フィールドから持ち帰ったデータは、教室のミニコン（能力的には20年前の大型コンピュータに匹敵する）に記憶させ、種々の分析を行なうことができる。等温線図なども、昔は手で描いたものだが、付属のXYプロッターで自動的に作成される。学生に要求されるのは、等値線をいかにうまく引くかという能力ではなく、コンピュータを用いていかに効率よく観測結果を分析・処理するかという能力である。

このような傾向は、地形学の教育でも顕著になっている。B教授は、地形計測実習の時間に、コンピュータ・グラフィックスを導入することに熱心であった。ブロックダイアグラムの自動図化は、すでに20年以上前から行なわれているが、これを立体映像化することに成功したのである。ホログラフィーを応用した装置で、日本全国の格子点高度データ（磁気テープに入力されている）をもとに、任意の地点で、任意の高度から、任意の方角を俯瞰した時の立体地形画像が、専用の立体映像